K-686

河北町埋蔵文化財調査報告書第2集

畑中（一の坪）遺跡

発掘調査報告書

1981

河北町教育委員会

畑中（一の坪）遺跡

発掘調査報告書

昭和56年3月

序

本報告書は、昭和55年度に実施した河北町大字溝延千刈地内並びに畑中地内にまたがる「畑中遺跡」（通称一の坪遺跡）の調査結果をまとめたものである。

この事業は、昭和54年にひきつづき、県営圃場整備事業等にかかる緊急発掘調査として計画されたが、河北町教育委員会は、大規模発掘調査の経験が乏しく県教委文化課の格段のご指導を仰がねばならなかった。55年はまた、異状天候に災いされたり、予定外の区画から大量の土器が出土したりして、村山西部土地改良事務所や西村山郡大堰土地改良区などに多大のご迷惑をおかけしたことに紙上をもって謝意を述べるものである。

遺構を概観するに、前年度調査地であった「熊野台遺跡」、「馬場遺跡」などと共に、寒河江川沖積地の微高地にあり、早期の農業生産集落地として活動した当時を証するものがあり、また大量の墨書土器の出現は町民の注目するところであった。調査地点には戦後土地改良のため掘削されたあとがあったが、概して遺物の包合層の保存状態は良好であった。

昭和55年８月６日には、県立米沢女子短期大学学長柏倉亮吉先生を迎え「第２回町民参加発掘の日」を設定し体験学習を企図したが、夏休み期間中であったため、盛況を呈し特に小中学校生徒の調査割り当て地区から重要な遺物が出土したことなど、苦しい中にも楽しく有意義な学習を終了したことも町づくりを考える一端となることと信じたい。

終りに、炎暑や豪雨のなかに発掘調査に協力していただいた調査員、作業員各位に深謝申し上げる次第である。

昭和56年３月

河北町教育委員会教育長

細　矢　敏　雄

例　　言

1.　本報告書は、河北町教育委員会が、昭和55年度に実施した「県営圃場整備事業にかかる大堰第２地区の緊急発掘調査」の報告書である。

2.　発掘調査は、河北町教育委員会が調査主体となり、河北町文化財調査委員会が調査を担当したものであり、調査期間は、昭和55年７月９日より８月30日までである。

3.　調査員は下記のとおりである。
野川主計　　高橋郁夫

4.　事務体制は、河北町教育委員会社会教育課が担当した。
総括　森谷啓助　　庶務　小山田恒吉　　小林久雄　　指導　浅黄三治

5.　遺構の挿図、拓影図、写真等は本文と同様記号で示し、出土した遺物は原寸の⅓を基本とした。

6.　本報告書の作成にあたって、文章の執筆は、野川主計、高橋郁夫、浅黄三治が分担し、挿図及び写真は浅黄透（学生）があたり、編集は、小山田恒吉、浅黄三治が担当した。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
1. 調査に至るまでの経緯 …… 2
2. 発掘調査団の発足 …… 2
3. 調査団の編成 …… 3
Ⅱ　遺跡の概観
1. 遺跡の立地と環境 …… 4
2. 遺跡の層序 …… 7
Ⅲ　発見された遺構 …… 9
Ⅳ　出土した遺物 …… 15
Ⅴ　ま　と　め …… 25

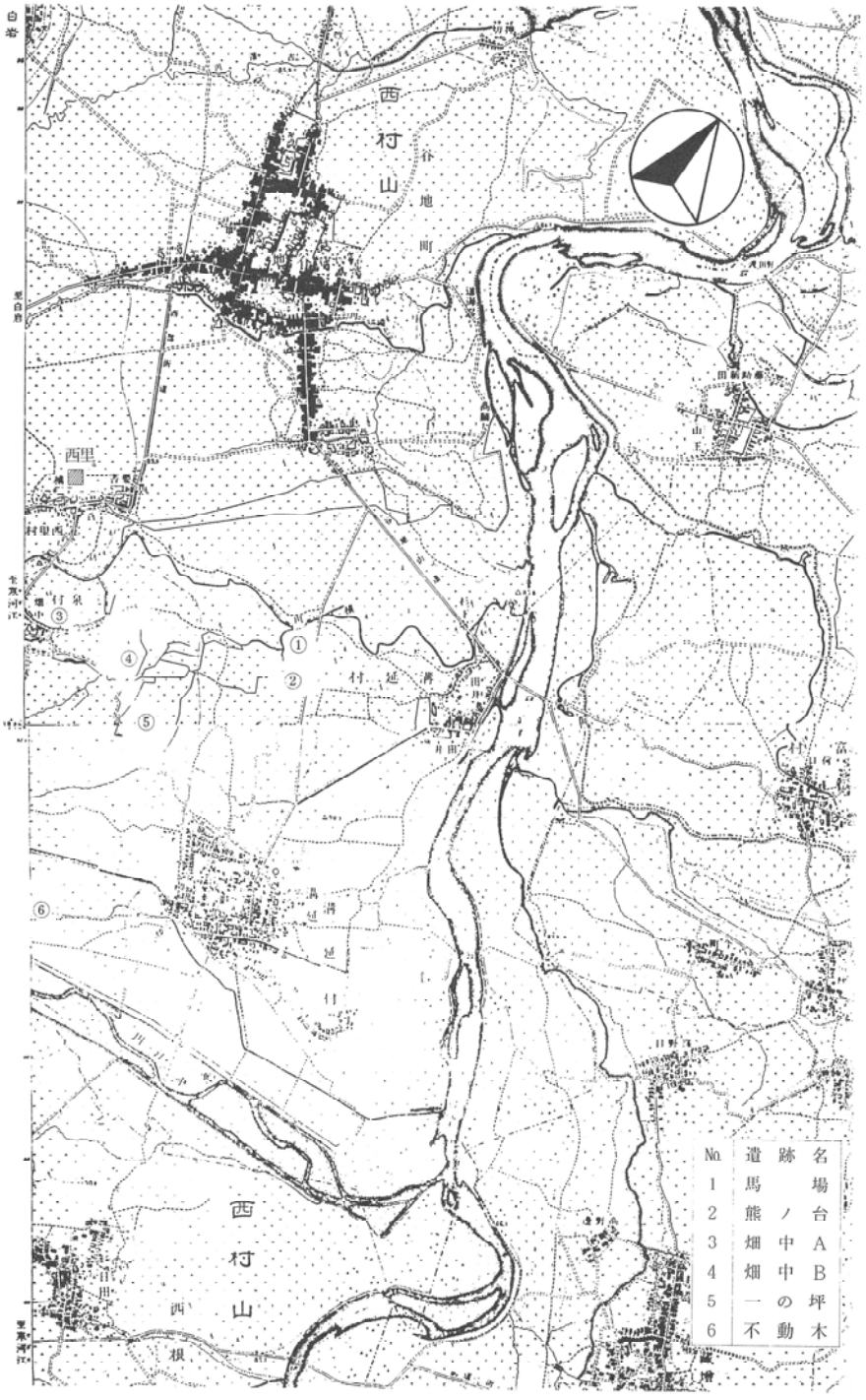
挿図目次

第1図　地形図 …… 1
第2図　E地区概略全体図 …… 6
第3図　土層図 …… 8
第4図　1号竪穴住居跡、7号炉跡部分図 …… 10
第5図　4号建物跡、5号、6号土壙部分図 …… 11
第6図　2号建物跡、10号土壙部分図 …… 13
第7図　3号土壙部分図 …… 14
第8図　実測図 (1) …… 21
第9図　〃 (2) …… 22
第10図　〃 (3) …… 23
第11図　〃 (4) …… 24

図 版 目 次

図版 1　調査区全景（発掘前、E 地区セクション、D 地区住居跡）……26
図版 2　出土状況（坏、甕、甑）……27
図版 3　発掘風景（町民参加発掘風景、炉跡、遺物）……28
図版 4　復元土器　坏、鉢、甕　……29
図版 5　復元土器　坩、鉢、甕　……30
図版 6　復元土器　壺、器台、植物種子　……31

畑中（一の坪）土器分類表　……32



第1図　地　形　図

明治37年陸地測量部発行

Ⅰ　調査の経緯

1.　発掘調査に至るまでの経緯

河北町畑中遺跡（Ａ・Ｂ）の存在については、昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」に記載されており、県営圃場整備事業の進捗に伴ない、昭和54年10月29日山形県教育庁文化課によって事前調査が行われた。その結果「畑中遺跡」Ａ・Ｂとも遺物が散在しており附近には、阿弥陀堂の古地名もあるところから関係機関と協議して緊急調査を実施することになった。

たまたま、畑中Ｂ遺跡南北200ｍの地点に、通称「一の坪」の名称が残っており、昭和27年～28年度において土地改良事業が施行された際に、遺物の出土があったと当時の関係者より情報を得たので平行した調査が行なわれることになった。

2.　発掘調査団の発足

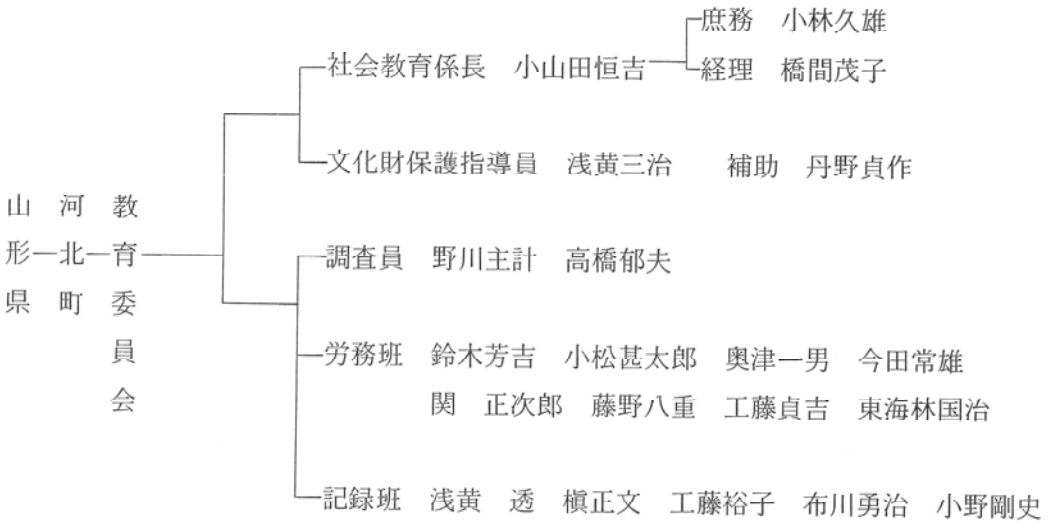
以上のような経過から、昭和55年６月25日、河北町文化財調査委員会が開催され、総額3,120,000円の調査費用をもって、河北町教育委員会が発掘調査を実施するよう協議された。河北町教育委員会では直ちに調査員会議を開催し、調査日程の検討をなし万全を期することになった。日程の概要を示せば下記のとおりである。

調査日程	概　要
７月９日	全域の基本測量
10日	鍬入式、器材搬入、発掘調査開始
11日　～　18日	第１地区測量、粗はぎ
14日	阿弥陀様遷座祭
15日　～	面整理、精査
19日	第１地区調査終了
21日	第２地区測量、粗掘り
24日　～　25日	重機借上、粗削り
28日　～	精査
８月６日	町民参加発掘の日
７日　～　12日	精査
18日　～　29日	精査、記録
25日	現地説明会

30日　　発掘調査終了、器材徹収

3. 調査団編成

遺跡調査の効果的な運営を図るため、次のような組織をつくり責任体制を明確にすることになった。



Ⅱ　遺跡の概観

1.　遺跡の立地と環境

山形盆地を北流してきた最上川が大江町付近で、その流れを東にかえはじめる。天童市寺津付近で再び流れを北にかえ、川幅も増しはじめる。朝日山系を源とする寒河江川が東流してきて、やや本流に逆流ぎみに天童市蔵増付近で合流している。最上川左岸と寒河江川左岸、背後を出羽山地にかこまれた略三角形状の地域に河北町が位置している。この地域は、寒河江川の不整形な扇状地が形成された後に、最上川の氾濫原となったりして複雑な地形を呈している。この氾濫原は地質的な所見から推定して、標高85m以下と考えられる。また、傾斜は、山地の山麓線から最上川までゆるやかにみられ、標高差は約15m前後である。

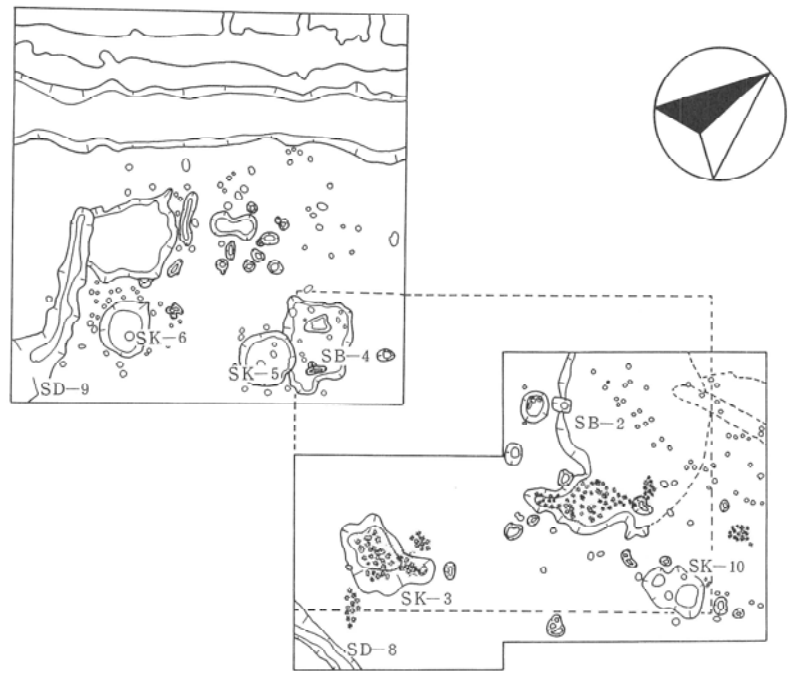
55年度に発掘調査を行った馬場遺跡の西南西約1.1㎞の地点に位置している。また近接して、同年度に発掘調査が行われた熊野台遺跡が南側に並んでいる。馬場遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・倉庫跡・土拡・溝跡と共に、多量の土師器と須恵器が出土している。時代は古墳時代末期から平安時代にわたっている。この両遺跡の周辺にはほぼ同時代の遺跡が多く発見されている。主なものとして北北東約800ｍのところに月山堂・北西約1.5㎞に下槇・南南西約1.3㎞に不動木（ゆするぎ）遺跡などである。今回調査した畑中Ｂ遺跡と一の坪遺跡もこれらの遺跡群の中にふくまれる。

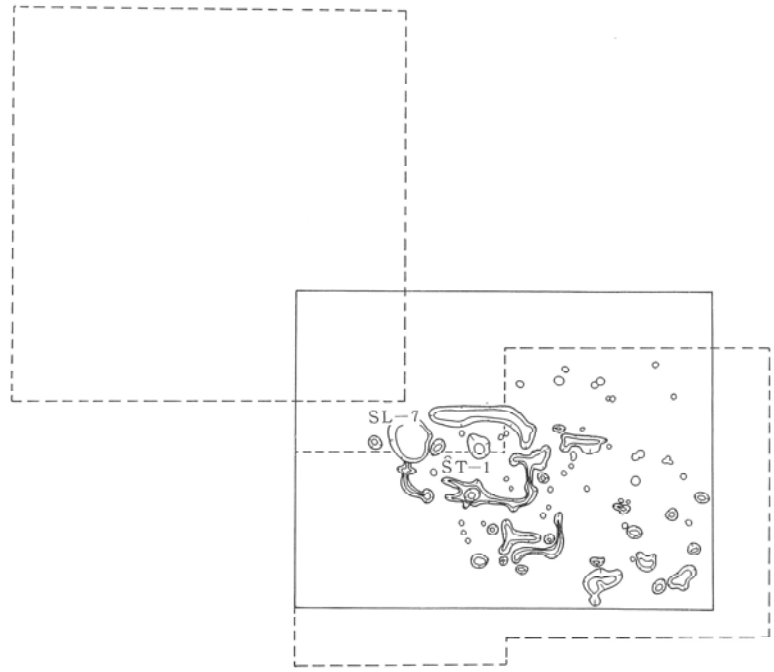
一の坪遺跡の間来は、条里制の呼称からきたものと推定できる。山形盆地では条里制遺構が20カ所以上確認されており、その大部分が扇状地末端に位置している。その主なものとしては、東根市東根温泉付近、山形市西南部、山辺町南部、天童市西部（成生）一帯、中山町西部、寒河江市東南部、河北町各地及び溝延一帯などがあげられる。これらの条里制遺構は、発掘によって確認された山辺条里遺構を除いて、明治20年前後の地籍図と航空写真及び現存する地名をもとに推定されたものである。山辺条里遺構のように発掘調査されて、正確な地割りと時代がほぼ確定されたのは貴重な業績である。一の坪遺跡の範囲は、約100ｍ×100ｍで60間×60間の一坪に相当し、長地式の坪内割りも地籍図で確認されている。

本町の条里制遺構は現存するものがほとんどなくなっている。明治初期の小字名の統合と明治末から大正初期にかけての耕地整理によって、古い畦畔や旧字名が失われたためである。ただ、明治21年図地籍図と名寄帳・検地帳から凡その位置と規模が推定できる。その一つとして溝延の北方に一の坪がある。さらに谷地の西方にも検地帳の記載をもとにす

ると一の坪が推定できるらしい。また寒河江市箕輪の東南方にも一の坪があったという。この三地点の位置関係は次のようである。①　溝延一の坪は谷地一の坪とほぼ南北線上にならび距離は約30町（3.0㎞）である。②　溝延一の坪は箕輪一の坪より南に13町（1.3㎞）、東に36町（3.6㎞）にあたる。③　谷地一の坪は箕輪一の坪より北に18町（1.8㎞）、東に36町（3.6㎞）にあたる。こうしてみると3地点は6町の倍数になっていることがわかる。1坪の大きさは1町×1町だから、6町四方というのは坪が6×6あることになる。まだ本町内の全体の条里制が判明しないために、それぞれどの条里に属するかは不明である。ただ条に関する地名として、谷地と溝延の中間付近に六条河原がある。寒河江市の南方にも三条の地名が小字としてみられるが、六条河原との関係も明らかでない。次に溝延付近の坪内割りは東西に長い長地式を基本としているようである。これは土地の傾斜が西から東に低くなっているために、東西方向の長地式をとったものと考えられる。

次に本町で条里制がしかれた年代については、「続日本紀」延暦二年六月朔の条に、宝亀十一年（780）に平鹿・雄勝二郡の百姓に口分田を給したという記事が見えることから、8世紀末よりも古くなる可能性がある。一の坪遺蹟から出土した土師器・須恵器も8世紀から11世紀のものが多くみられる。また山辺条里遺構でも、畦畔遺構と併出した土器も8～9世紀に比定できることから、8世紀後半には山形盆地に条里制が施かれたものと考えられる。





0 10 m

第 2 図　E 地区概略全体図

2. 遺跡の層序

遺跡は、西から東へわずかにゆるやかな勾配をもつ面に広がっている。遺跡の立地している地層は、すべて沖積面で、調査によって４枚の層が認められ、上の方からⅠ層からⅣ層に分けた。さらに地点によって、土色の差異にあわせてＦ層も３層に分類した。

＜第Ⅰ層＞

第Ⅰ層は、現在の水田の耕作土で、暗褐色を呈し、層の厚さは８～16cmである。一部の地点で薄くなるところもあるが、水田面一帯にほぼ均等に分布している。

＜第Ⅱ層＞

第Ⅱ層は、Ⅰ層にくらべてしまりがあり、粘性がある。色調は茶褐色で微砂質土である。層の厚さは5～８cmで、炭化物・酸化物の混入がみられる。土器片もこの層の上部から出土している。

＜第Ⅲ層＞

第Ⅲ層は暗茶褐色を呈し、Ⅱ層と同じくしまりがありかたい。土質は微砂質土で、炭化物・酸化物の混入がみられる。層の厚さは、全体的に薄く、２～８cmである。遺物は平安時代に属する土器が出土している。

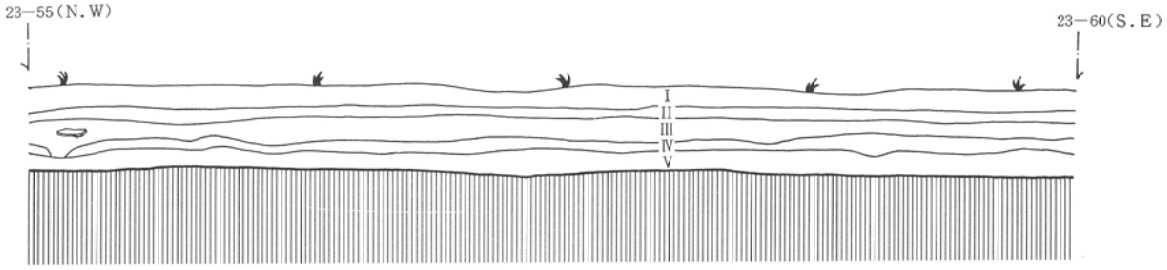
＜第Ⅳ層＞

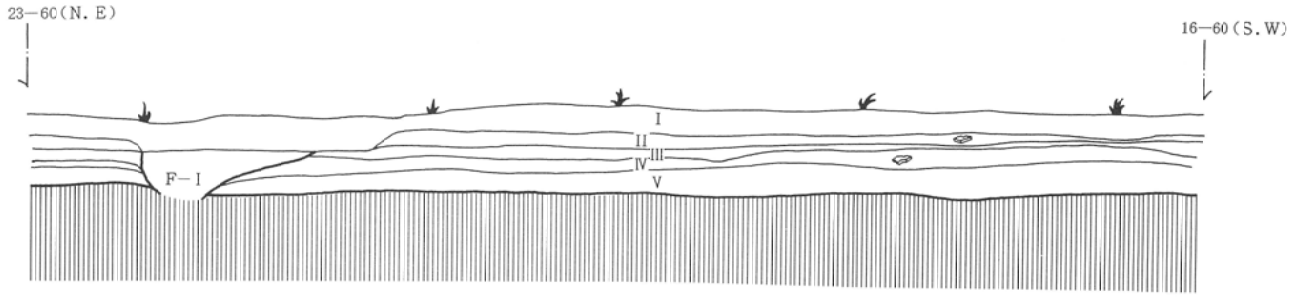
第Ⅳ層は、青灰褐色を呈するシルト層で、層の厚さは８～18cmである。炭化物・酸化物の混入が見られ、細砂も部分的にみられる。この層は、微砂質土で、しまりがある。出土遺物は、この層でははとんど発見されていない。

＜Ｆ層＞

Ｆ層は色調が上記と多少違いがあり、灰褐色を呈する。さらに明るさの差違と粒子の大きさによってF_1～F_3層に分類した。明るさ・粒子の大きさはF_3層の方がF_2層よりも大きい。また暗灰褐色を呈するものを、F_1層とF_{II}層に分けた。明るさはF_1層の方が明るい。遺物は、F_{II}層から発見されている。

第3図　土　層　図





23—55～23—60
- 第Ⅰ層　耕　作　土
- 第Ⅱ層　黄茶褐色土　微砂質土
- 第Ⅲ層　黒茶褐色土　微砂質土
- 第Ⅳ層　灰茶褐色土　微砂質土
- 第Ⅴ層　青灰褐色土　微砂質土

23—60～16—60
- 第Ⅰ層　耕　作　土
- 第Ⅱ層　茶 褐 色 土　微砂質土
- 第Ⅲ層　黒茶褐色土　微砂質土
- 第Ⅳ層　青灰褐色土　微砂質土
- 第Ⅴ層　青灰褐色土　微砂質土
- Ｆ－Ⅰ　暗灰褐色土　微砂質土

0　2m

Ⅲ　発見された遺構

一の坪遺跡の今回の調査で確認された遺構は、竪穴式住居跡・カマド跡・炉跡・土壙・柱穴群・溝跡などである。このうち、明瞭な竪穴式住居跡１棟・カマド跡１カ所・炉跡１カ所である。このように、発掘面積が広い割に遺構の検出が少ない理由は、耕作土の層が薄いために、耕作による撹乱がひどいことと、暗渠工事によって文化層がところどころ分断されている個所が多いことにある。

１号住居跡

本遺跡で明瞭に確認された唯一の竪穴式住居である。Ｅブロックのｂ地区、やや東側に位置している。住居プランは、東西の北側柱間は２ｍ、東側柱間は３ｍ、南側柱間は約２ｍ、西側柱間は約３ｍのやや不整方形を呈する。西側柱間の線は磁北より東へ約44度ふれており、ほぼ北東方向をさす。柱穴の大きさは27㎝から32㎝までである。南壁隅に馬蹄形を有する比較的大形のかまどがある。焚口部が北東に、煙道が南西部を示す。また煙道の開口部が２つに分かれていることに特徴がある。これは煙道の幅が広い（25㎝×17㎝）ために、上壁の落下を防ぐために中央部を補強するためのしきりを入れたものと考えられる。この住居跡は竪穴式住居と考えられるが、周壁のたち上がりを確認できなかった。住居跡内部西側に略三角形のピットが発見されたが、関連は不明である。

２号住居跡

１号住居跡の南西10ｍの地点にある。カマドが先に検出されたために、住居跡を探したが、平面プランは確認できなかった。第１に柱穴が不整な配列で、しかも周壁の存在が確認できなかったことと、カマド跡と接して現在の用水路がきられていることが主な原因である。

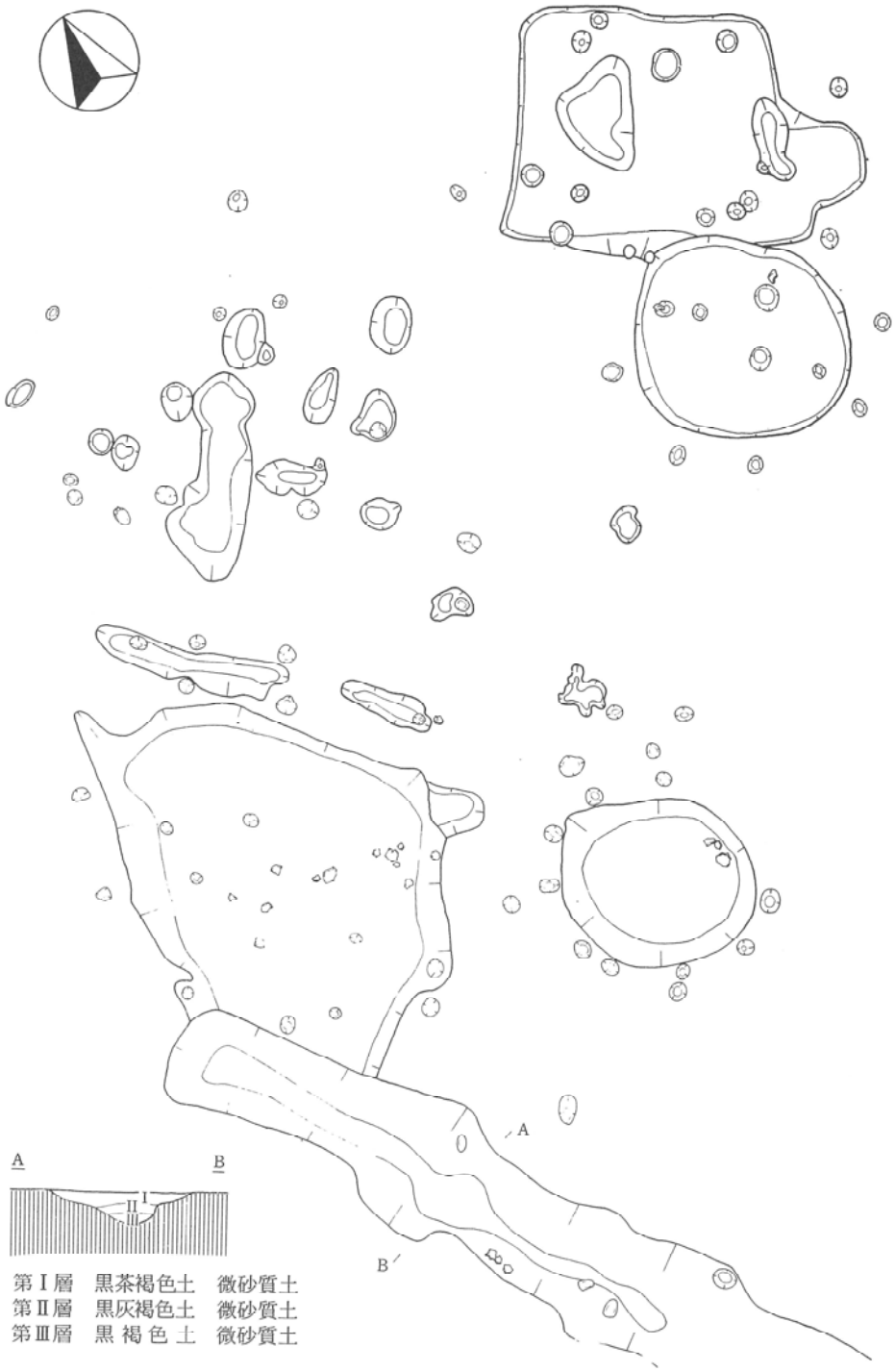
その他の遺構群

㈠炉　跡

１号住居跡の北側約８ｍの地点に、土師器片で周囲をめぐらした炉跡が検出された。直径は約30㎝である。内部には木灰と炭化物が密集してあった。周辺は捨場であって関連する住居跡は全く不明である。

㈡捨　場

第4図　1号竪穴住居跡、7号炉跡部分図



第5図　4号建物跡、5号、6号土壙部分図

上記の炉跡を含む中央区に、土器片と卵大から瓜大の礫と共に集中的に散乱している個所が2カ所あった。これらは、凹凸のある面でしかも凹部に土器片が集中していることと完形の土器がほとんど見られないことから捨場と考えられる。これが、集落跡とどのような関連をもつのか明らかにできなかった。

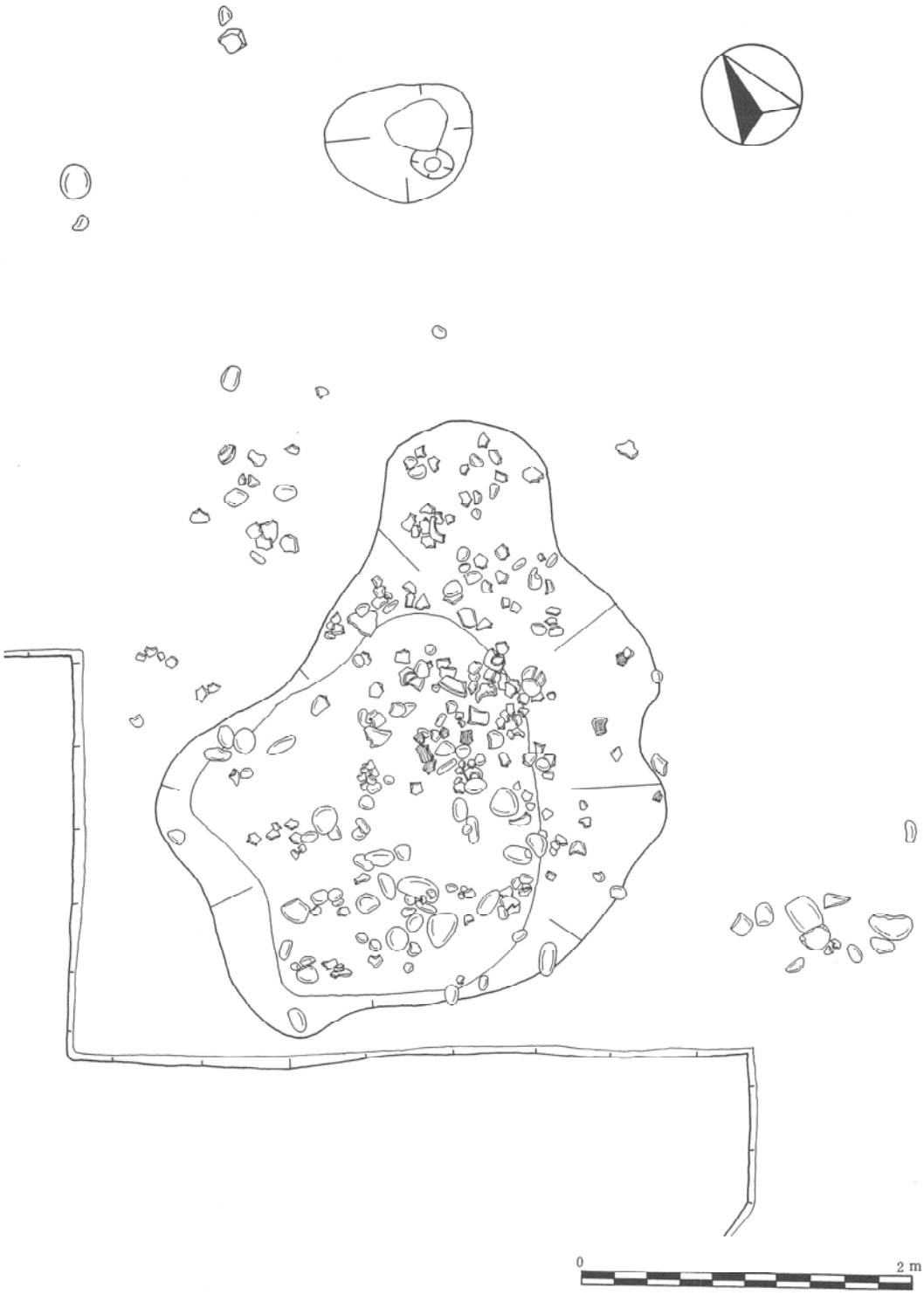
(ウ)柱穴群

発見された柱穴の数は１９６であり、ほとんどが丸柱である。このうち明瞭に確認できた住居跡は1棟のみである。いずれにせよこれらの柱穴群が、建物を構築していたのだから、今後も検討を加えて明らかにしていきたい。

(エ)溝　跡

今回の調査でも、多くの溝跡が発見されている。これらの中には暗渠排水のものが中央区の東側にみられて、遺跡を分断している。しかし、西側の溝は、1号住居跡とほぼ平行して走っており、何らかの関連があるものと考えられる。

第 6 図　2 号建物跡、10号土壙部分図



第7図　3号土壙部分図

Ⅳ　出土した遺物

発掘された遺物は整理箱にして約60箱である、内容は土器が大半であるが、他に古銭植物の種子、石製品、等で遺構や土壙から炭化物と共に検出されている。

土器は完形の物が少なく、復元によるものが大部分である、その他復元可能な物、口縁部、底部、等の破片257個、残部は小破片でポリ袋に入れ50袋程度である。

年代的には古墳時代～平安時代に至る、(今から約1,200)の長い期間の土器が発見されている。土器が使用されたのは縄文時代から続いているが、弥生式土器と共に発達して（土師器）は此の時代に製作された、黄赤色の素焼土器の総称である、成形から調整にかけて粘土紐を巻上げ又は輪積法などの原始的な技法で成形され、又回転ロクロ調整のものもある、底面に糸切とヘラ削り調整と木葉圧痕のものとあり、胎土は良質の粘土を使用している、大半は煮炊用の食器が多く、坏、碗、甑、甕、等で祭祀用には高坏、器台、坩、壺、皿、等があり、また、調整による文様、刷毛目、櫛目、莚目、籠目、木葉痕、等もみられる。

焼成は酸化焔によるもので、これは800度前後の温度で焼成され、色調は黄赤色、赤褐色、茶褐色、灰褐色、等を呈す。又この時期に黒色化土器も製作されて、内黒土器も多数出土している。土師器の質度は一般に軟質である。

（須恵器）この土器は古墳時代中期頃に、中国、朝鮮方面から其の技術と共に輸入された土器であり、奈良時代末期から平安時代にかけて盛んに製作されて居り質も硬く、色調は青灰色又は灰褐色、灰白色、等あり成形から調整にロクロを使用し、焼成は登窯を利用した還元焔焼成である、温度は1,000度以上の温度で焼成されている。器体の大きい物は器の表面と器内面に叩き目文が施されている、円心文、波状文、櫛目文、籠目文、縦、横、斜線等の圧痕が見られる。

ＲＰ、Ｄ－３０坩

底部径６㎝器高7.2㎝口径8.6㎝胴部径8.2㎝頸部８㎝口縁部外反し、器厚0.4㎜～0.5㎜器表上部は叩目文が施され、下部は斜線があり器内面は横に櫛目状痕ありヘラ削りになっている、底部は莚状痕が見られる、調整はやや粗末である、器体は軟質で色調は黄褐色を呈す。

ＲＰ、Ｄ－６坩ＳＴ１３

底径５㎝器高9.6㎝口径１０.8㎝胴部径１１.4㎝頸部１０.4㎝器厚0.3㎜～0.9㎜器表面に斜線櫛目文あり頸部～口縁部にかけて横に刷毛目文あり、調整は良好で底部平底器内はなで仕上げ無文である焼成軟質で色調は赤褐色、器全体が丸味ある観を呈す。（完形品）

ＲＰ、Ｄ－２０坩ＳＴ３

底径６㎝器高8.6㎝口径１２㎝肩部１２.5㎝器厚0.4㎜～1.5㎜平底調整良好、焼成軟質、色調灰褐色を呈す、器内外無文である。（復元）

ＲＰ、ＥＤ－１甕小形Ⅳ

底径９㎝器高１５.5㎝口径１３.7㎝胴部径１４.3㎝頸部１２.2㎝器厚0.4㎜～１㎝口縁部は外反し、いくぶん内側に折り反しされている。器内は無文でなで仕上げ、器表面は横にロクロ目あり底部糸切りで調整良く、焼成は軟質で色調は茶褐色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｄ－２３深鉢　ⅢＴ１０

底径１０㎝器高１１㎝口径２１㎝器厚0.4㎝～0.7㎝底部厚1.4㎝調整ロクロ使用、器表面横にロクロ目あり、器内は横なでに仕上げている。焼成は軟質で色調は赤褐色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｄ－１甑　ⅢＳＴ１

底径9.5㎝器高２７㎝口径２８.2㎝胴部径２３.8㎝口縁部は頸部より急に外反し、器形全体が３角形を示す、器厚0.4㎜～１㎝底部は0.6㎜程度の厚さで底は丸く穴に成って居り、器内はなで仕上げ、器表面は横と縦に櫛描文が施されている、焼成は軟質で色調は赤褐色を呈す。

ＲＰ、Ｄ－２０器台　Ⅲ

脚部破片一底径６㎝器高6.1㎝胴部径５㎝焼成軟質、色調灰褐色である、他に３個出土して居るが、いずれも破片が多く復元に至らず、実測図に示す。

ＲＰ、Ｃ－３甕　Ⅲ

底径8.0㎝器高２７.0㎝口径１８.７頸部3.２㎝胴部径２０㎝器厚0.５㎝～0.６㎝焼成軟質で色調灰褐色を呈す、他に甕に属するもの１８個あり、いずれも破片である。（複元）

ＲＰ、ＥＤ－２８甕　Ⅲ

底径8.１㎝器高２0.５㎝口径１７.９㎝胴部径１８.５㎝器厚0.４.㎝～0.７㎝を測る成形にロクロ使用焼成軟質で色調は茶褐色を呈す。この器形に属するもの２９個出土し、いずれも破片である。（復元）

ＲＰ、Ｄ－１器台　Ⅲ

脚部破片、底径１０㎝器高７㎝胴部径4.５㎝焼成軟質色調灰褐色を呈す。

ＲＰ、Ｄ－２３高坏　Ⅲ

脚部破片、底径１3.２㎝器高9.２㎝上部径１０㎝胴部径7.２㎝焼成軟質色調灰褐色を呈す。

ＲＰ、Ｄ－３０器台　Ⅲ

脚部破片、底径１２㎝器高7.６㎝胴部径4.５㎝焼成軟質で色調は赤褐色を呈す。

ＲＰ、Ｃ－１１高台付碗

底径5.6㎝器高4.7㎝口径１0.7高台0.4 5㎝器厚0.4㎜焼成硬質色調青灰色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｃ－１４Ｂ坏　Ⅲ

底径8.5㎝器高3.6㎝口径１４㎝底部ヘラ削り不調整、焼成硬質色調青灰色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｄ－３０坏（高台取手付）

底径7㎝器高5.5㎝口径１0.5㎝高台1㎝取手長4.5㎝巾2.3㎝厚1㎝～0.8㎜成形調整にロクロ使用、焼成硬質色調青灰色を呈す、（復元）他に同形式の取手２個、甑取手３個、内黒坏取手１個、坏取手１個等も出土したが、いずれも破片である。

黒色化土器

ＲＰ、Ｃ－４０　浅鉢

底径８㎝器高6.6㎝口径１5.7㎝器厚0.4㎝内黒色底部糸切りロクロ調整、焼成軟質色調黄褐色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｃ－４１　浅鉢

底径９㎝器高６㎝口径１5.6㎝器厚0.4㎜内黒色底部平底ヘラ削りロクロ調整、焼成軟質色調黄褐色を呈す。（復元）

その他両面黒色化土器も３個ほどあり、復元によるもの６個、復元可能なもの合せて５０個ほどで、いずれも破片である、年代的には平安時代中期かと推定される。

ＲＰ、Ｃ－４５坏　高台付

底径7.5㎝器高5.3㎝口径１2.6㎝高台0.9㎝器厚0.4～0.7㎝を測る、ロクロ調整、焼成硬質色調は青灰色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｃ－１２坏　Ⅲ

底径8.5㎝器高4.5㎝口径１４㎝器厚0.4㎝底部ヘラ削り調整、焼成硬質色調は灰白色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｃ－４４坏　高台付

底径8.6㎝器高4.6㎝口径１4.2㎝高台1㎝ロクロ調整器厚0.4～0.7㎝焼成は良好で硬質、色調は青灰色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｅ－０１壺　ⅢＳＫ１

底部丸底～胴部径４３㎝器高４4.7㎝口縁部径１８㎝頸部径１６㎝頸部～口縁部高さ６㎝底部～頸部迄の高さ３8.7㎝を測る。口縁部は頸部よりやや外反し、口縁部の口唇を形成している、頸部より胴部にかけて斜にゆるやかな曲線を形成し肩部より底部にかけて曲線

が急に下降して、底部の曲線を形成している。器厚は口縁部で1㎝胴部1.5㎝底部1.2㎝～2㎝を測る器表面は斜線の圧痕で、器内面は籠目の叩き文になって居る、口縁部両面はロクロ調整で横に刷目の痕が見いる、焼成は硬質で色調は青灰色を呈す。（復元）

此の種類の破片で最も多い模様を図に示すと、円心文、渦巻文、櫛描文、網目文、籠目文、波状文、6種類が見られるが、そのうち籠目文が最も少なく、計130片の内、わずかに10片位しか検出されない、又丸底の壺は珍しい形である。

ＲＰ、Ｃ－２３Ａ坏

底径6.5㎝器高3.5㎝口径14㎝器厚0.4㎜～0.7㎜成形ロクロ使用底部糸切調整、焼成硬質で色調は青灰色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｅ－０２９Ⅲ

底径6㎝器高2.4㎝口径13㎝器厚0.3～0.4㎝を測る成形ロクロ使用底部糸切調整焼成硬質で色調は青灰色を呈す。（完形品）

ＲＰ、Ｃ－２２Ａ坏

底径9.5㎝器高4.5㎝口径15㎝底部ヘラ削り調整、焼成硬質、色調は灰白色を呈す。（復元）

ＲＰ、Ｃ－３０坏　高台付

底径8.8㎝器高4.2㎝口径１3.6㎝高台１㎝ロクロ使用ヘラ削り調整、焼成硬質色調灰褐色を呈す。

ＲＰ、Ｃ－７坏　土師器

底径5.5㎝器高5.1㎝口径１3.5㎝器厚0.4～0.7㎝ロクロ使用糸切調整、焼成軟質色調黄褐色を呈す。　　墨書土器合計41個、内訳　須恵器４０個　文字別―　申２５個

土師器　１個　その他―　１６個

尚墨書の説明に付いては今後の研究を待つ事に致します。

ＣＫＨＨＮ－Ｂ、古銭　Ｔ２Ⅱ

ＲＭ、永楽通宝　１枚、径2.5㎝厚0.1㎝暗緑色、1,４８０年、明の永楽年間に鋳造された銅銭で日本に輸入されて、流通したものである。

これは畑中Ｂ第２トレンチ内で発見されたもので、通称阿弥陀堂跡かと推定される。

ＲＱ、Ｅ、－０３０Ⅲ　砥石　ＳＤ

長さ4.4㎝巾3.5㎝厚1.6㎝破片1個、灰褐色、これは鎌を研ぐに使用されたものと推定。

ＲＱ、Ｃ、－２８Ⅲ　砥石　ＳＤ

長さ6.7㎝巾4㎝厚3.3㎝破片１個、これは面整理中に検出されたもの、　同上

長さ5㎝巾3.4㎝厚1.5㎝破片１個、これは鎌を研ぐのに使用されたものと推定。

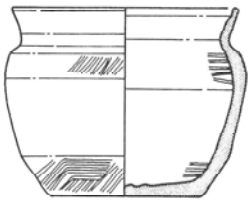
ＲＮ、Ｅ－０２８　ＳＫ種子

ももの種２個、くるみ実１個、炭化米２０粒ほど

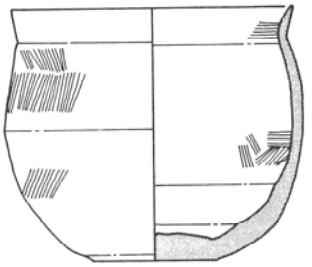
これはＥ、地点の炉跡近くの土壙より検出されたもので、植物の炭化せる色は黒褐色を呈す。

記号　ＳＴ―竪穴、ＳＢ―建物、ＳＤ―溝、ＳＰ―ピット、ＳＬ―炉、ＳＫ―土壙

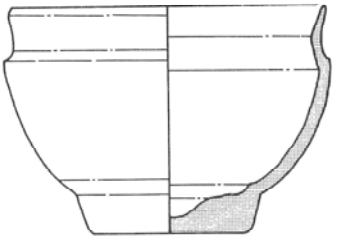
ＲＰ―土製、ＲＭ―金属製、ＲＱ―石製、ＲＮ―自然物



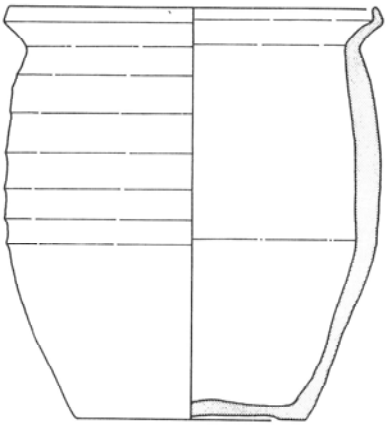
D－30



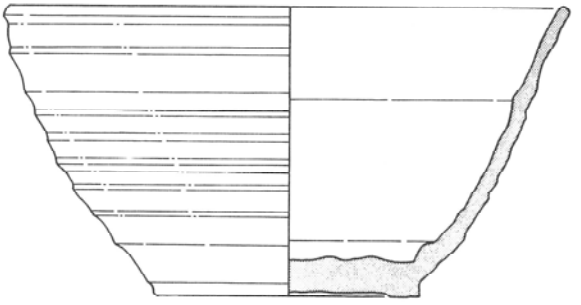
D－6（ＳＴ13）



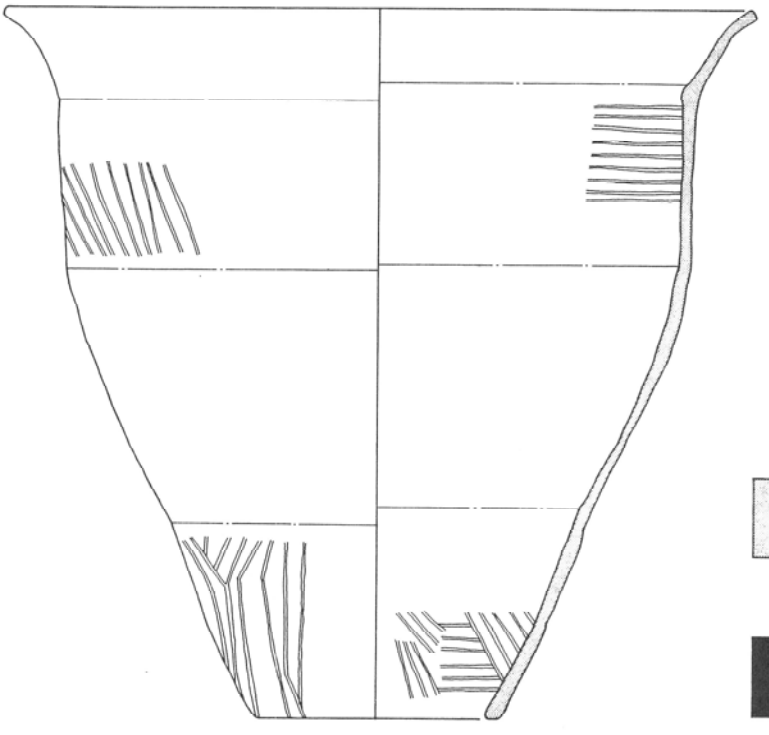
D－20（ＳＴ３）



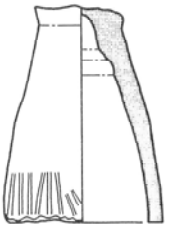
ＥＤ－1



D－23－Ⅲ（Ｔ10）



D－1（ＳＴ1）



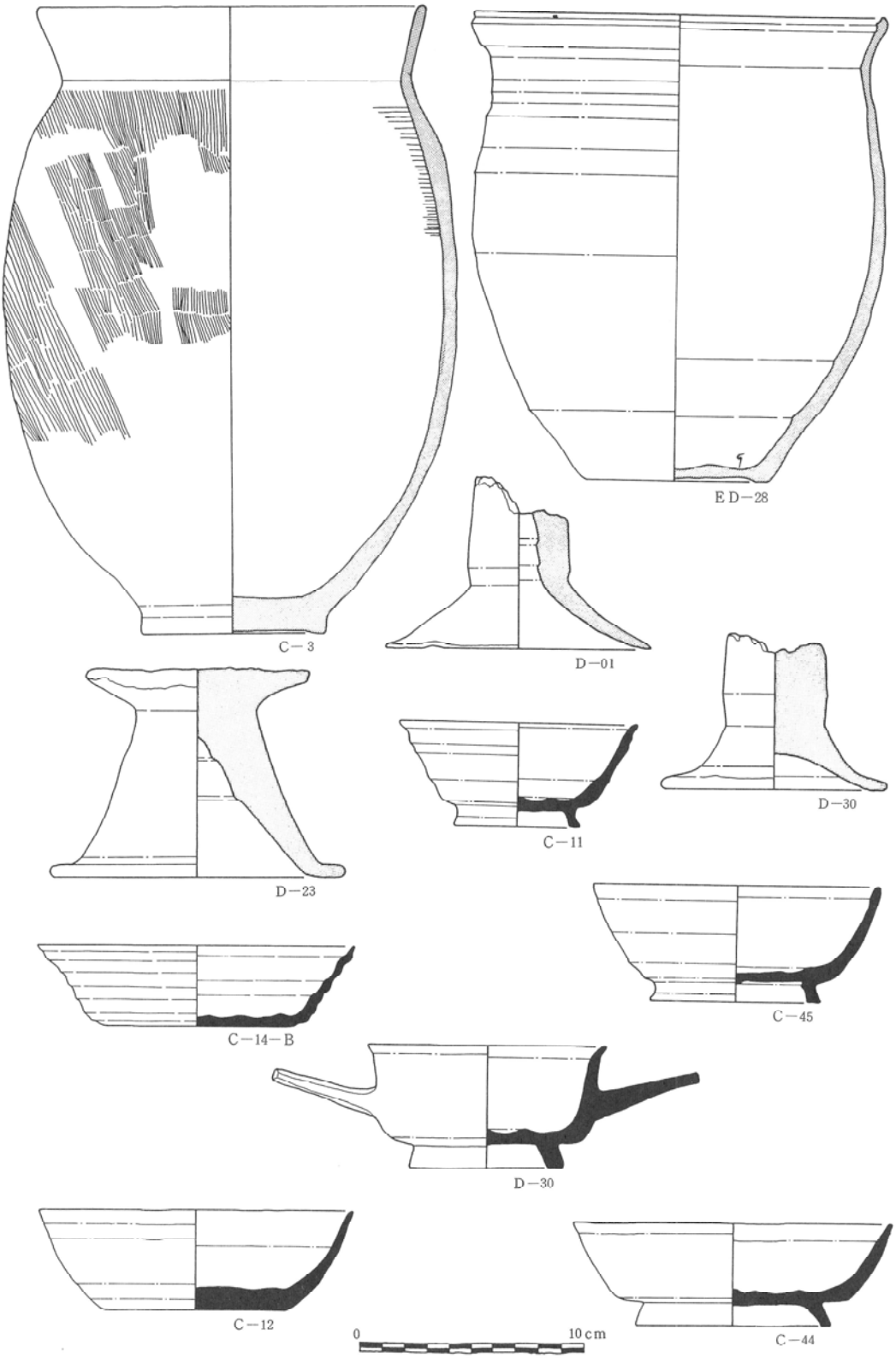
D－20－Ⅲ

土師器

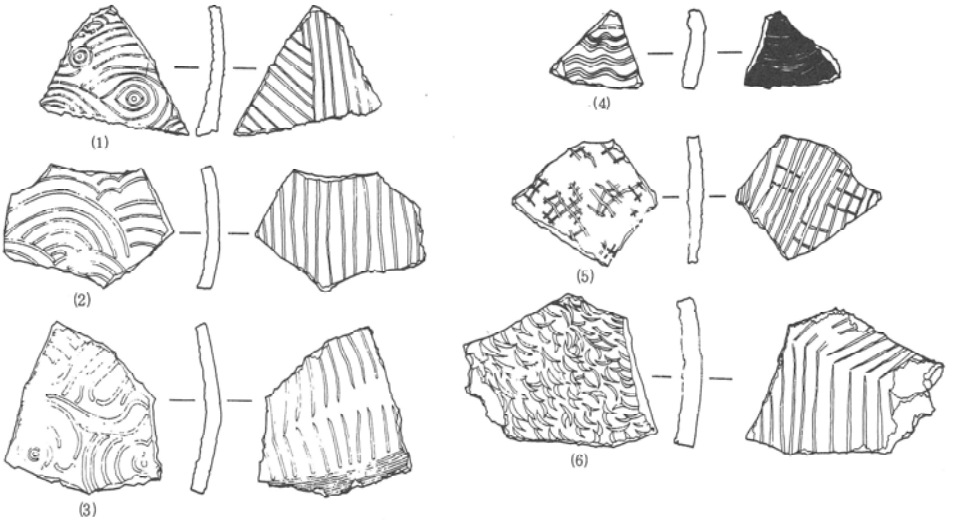
須恵器

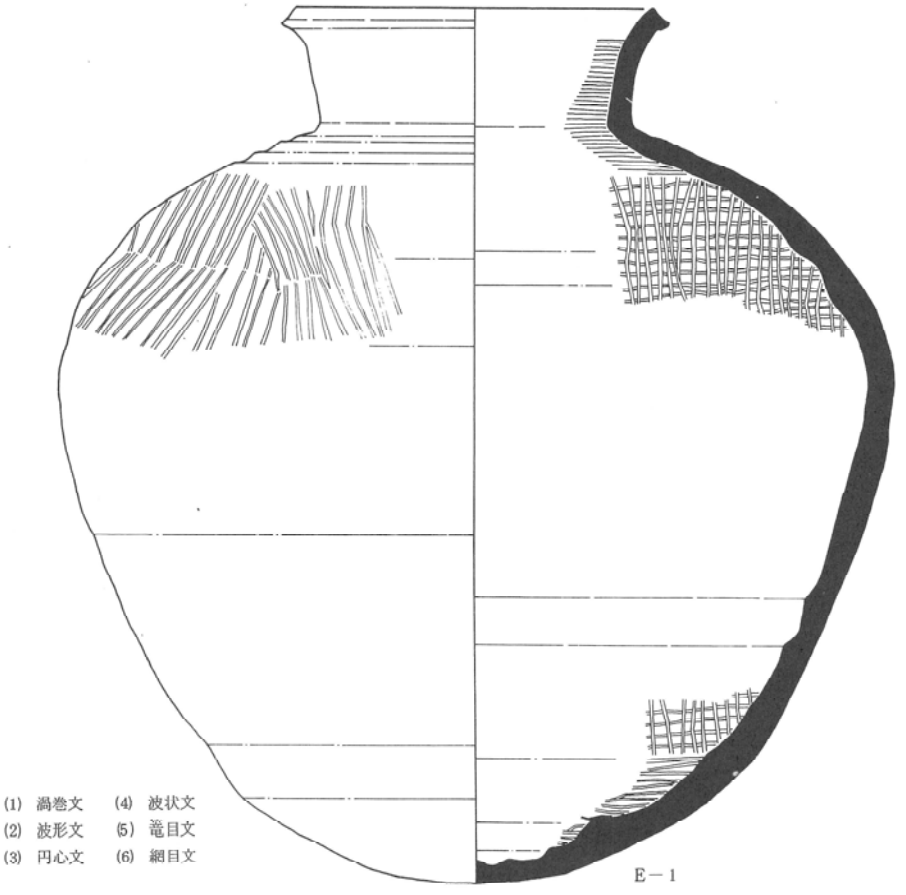
0　10cm

第8図　実測図（1）



第9図　実測図（2）

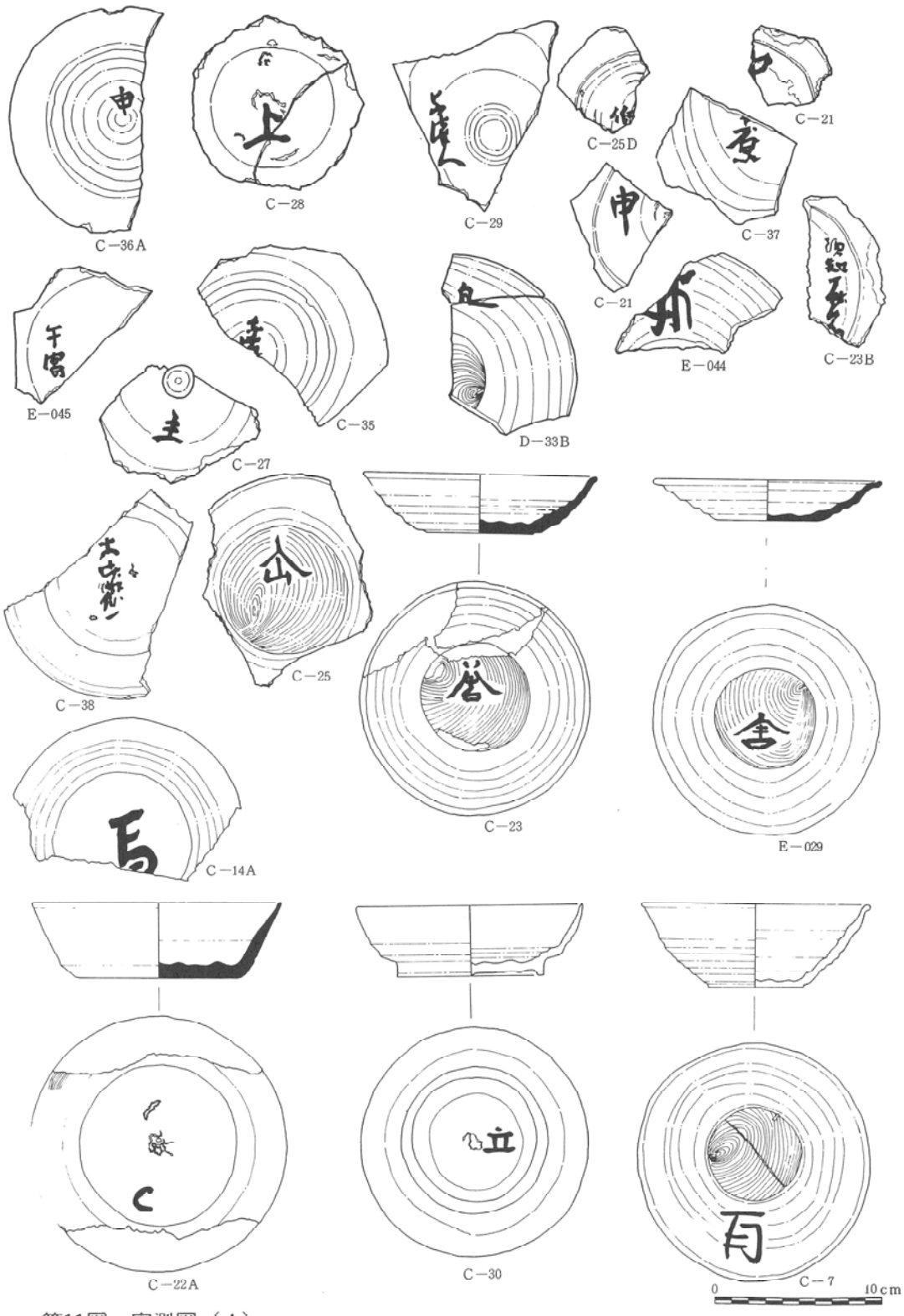




(1) 渦巻文　(4) 波状文
(2) 波形文　(5) 竜目文
(3) 円心文　(6) 網目文

第10図　実測図（3）

0　10m


C－36A
C－28
C－29
C－25D
C－21
C－37
C－21
C－23B
E－044
D－33B
C－35
E－045
C－27
C－38
C－25
C－23
E－029
C－14A
C－22A
C－30
C－7
0
10cm

第11図　実測図（4）

Ⅴ　まとめ

畑中Ｂ遺跡と一の坪遺跡の２か所にかけての、発掘調査である、総面積1,２００㎡で７月10日～８月30日まで実施され、畑中Ｂ地点は標高92ｍの底湿地帯である。２ｍ×10ｍのトレンチを６か所に設定し、試掘精査の結果遺構の発見は出来なかったが、遺物は永楽通宝１枚と土器破片３片だけ、その他の遺物なし、表土10㎝～15㎝以下砂礫層で、洪水による旧河川床と推定される、現在の田面は其後脚土によって造成された事であろう。

一の坪は畑中と地続きで、標高92ｍの底湿地帯である、Ｅ地点を基準にして発掘調査を実施２ｍ×10ｍのトレンチを設定し、試掘作業中Ｅ地点の南側に基盤整備の排水溝が掘られ、その内外より多量の土器破片を発見し、急を用するため予定を変向し溝の東方約３００ｍにＣ地点を設定し２ｍ×10ｍのトレンチを数か所に配置し急を要する調査で遺構の検出は出来なかった、出土遺物は整理箱で約30箱ほど出土し、大半は須恵器の破片である。

坏、蓋、高台付坏、等が最も多く特に墨書土器が36個を数える、出土状況から流水溝と推定し上流の地点を南西方約200ｍの所に標高93ｍの微高地があり、此こにＤ地点を設定し更に調査を進め２ｍ×10ｍのトレンチを10か所に配し精査の結果、竪穴住居跡２か所土壙２か所その他出土遺物によって、一の坪周辺に奈良時代の集落が有った事が確認され、県内に於ける農耕文化の基礎的資料として貴重な物である。

図　　版

図 版 1

E調査地区遠景（発掘前）

E地区土層セクション

D地区の住居跡

坏の出土状況

甕の出土状況

甑の出土状況

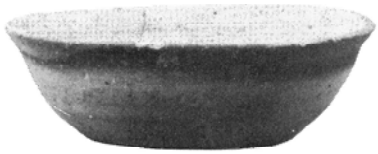
7 号炉跡

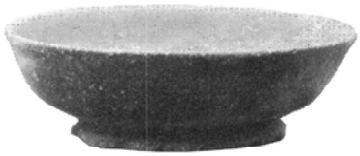
石、土器群

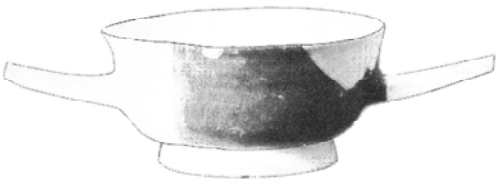
県民参加発掘の日

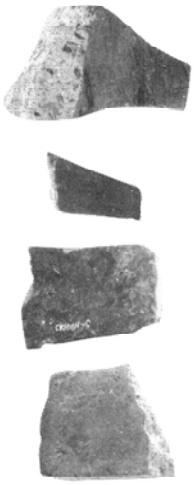
墨書（須恵器）

墨書（土師器）









一の坪土器分類表

CKHHN	ヘラ切坏	糸切坏	高台付坏	蓋	皿	碗	鉢	甑	甕	壺	坩	高坏	器台	取手	完形	複元	残	集計
C.一土師器	18	4	3						18		1					5	40	89
C.一須恵器	67	19	26	23		3									2	39	44	223
C.一黒色土器		3		1			3			1				1		4	5	18
D.一土師器	4	6	1				6	1	19		5	2	3	2	1	9	39	98
D.一須恵器	6	6	5	3	1				4	1				1		5	22	54
D.一黒色土器		3	3														6	12
E.一土師器	6	26	4					1	29		2				3	18	47	136
E.一須恵器	1	11	4	3	1	2			8	3				1	2	9	23	68
E.一黒色土器		2	31													2	31	66
集計	102	80	77	30	2	5	9	2	78	5	8	2	3	5	8	91	257	764

河北町埋蔵文化財調査報告書第２集

畑中一の坪遺跡
発掘調査報告書

昭和56年３月28日印刷
昭和56年３月31日発行
発行　河北町教育委員会
印刷　㈱田宮印刷所